

# 学生の漢字書字能力に関する一考察

林 朝 子\*

小学校国語科の書写の分野を指導する際、教員自身の書字能力の有無は子どもたちへの指導内容に大きく影響する。本稿では、教員を目指す学生に、「普段書く漢字」と書写で扱う楷書漢字を比較させ、楷書漢字が持つ、読みやすさ・書きやすさを支える「基本点画」「筆順」「字形」の観点に関する気づきの程度を明らかにする。学生の気づきやすい観点は「基本点画」であるが、「筆順」「字形一部分の組立て方」については、気づきが少なかった。このような気づきの差は、それぞれの学生が漢字書字の際にどのような観点到意識を向け、書いているのかにも当てはまる差であろう。本稿で楷書漢字を支える観点到対する学生の意識の差を明らかにすることで、学生の気づきにくい観点到については、授業での書字指導の際に重点的に取り上げられ、適切な楷書漢字書字指導に結びつくと考えらる。

キーワード：楷書漢字・書字・普段の字

## 1. はじめに

学生の持つ小学校書写に対する印象は非常に薄く、「書写」という時間が設けられている意義もわからないという疑問を持つ者さえいるのが現状である<sup>1)</sup>。その背景には、書写の授業を担当してきた教員の書写に対する考え方や指導力がどの程度であるのかという問題が潜んでいると考えらる。

小学校国語科の書写の分野に関する指導を行う際、その基礎力として教師自身の書字能力が求められる。筆者が担当している「小学校専門国語」の書写に関する授業内容では、小学校において適切な書写指導に臨めるよう、学生の書字力向上を目指している。しかし、書字力を高める以前に、「どのような観点到意識を向けて文字を書くのか」という視点をを持つ必要がある。浦野他（2001）でも教員養成課程の学生に求められる書字力として「慣れや経験による字形の実現ではなく、指導事項をおさえた書き方でなくてはならない<sup>2)</sup>」と指摘している。

本稿では、小学校書写で扱う楷書漢字を取り上げ、学生自身が自らの文字と手本の文字を比較することで、どの程度の楷書漢字に関する指導事項を意識できるのか、あるいは、意識できないのかを明らかにし、今後の学生に対する書字指導の際の一指針へと結びつけたい。

楷書漢字の指導事項は、楷書漢字が持つ、読みやすさ・書きやすさを支えるものとして、「基本点画」「筆順」「字形」の3点が重視されるであろう。本稿では、『新編書写指導』（2006）で挙げられている、これら3点を学生が意識すべき指導事項としていきたい。

## 2. 小学校書写における楷書漢字

小学校書写で扱う書体は楷書のみであるが、楷書を学ぶ意義は楷書の持つ「強い構築性」と「規範性」にある。楷書とは「漢字を構成している点や線をくずすことなく、整然と書いた書体であり」「楷書を構成するそれぞれの点画は、いずれも明確であり独立している。そしてそれらが揺るぎなく組み立てられている」<sup>3)</sup>書体である。そして、この楷書体が持つ構築性と規範性を起因とする読みやすさと書きやすさの点から、「現代の標準的書体」となり、学校教育における漢字指導も楷書から導入が行われている。

では、楷書漢字を書字する場合、その読みやすさ・書きやすさを支える3点について具体的に記す。

### a) 基本点画

楷書漢字を構成する基本的な線や点やその運筆を指す。本稿では、以下の9種類を基本点画とする。

横画・縦画・折れ・はね・左払い・  
右払い・点・そり・曲がり

### b) 筆順

国語教科書の筆順に関する部分の扱いは、昭和33年の文部省発行『筆順指導の手引き』によるところが大きい<sup>4)</sup>。右手の動きを念頭におき、「書きやすく、整えやすく、かつ読み誤りにくい」<sup>5)</sup>書き方ができるように、最も合理的と考えらる筆順が挙げられている。

### c) 字形

字形は、実際にある漢字が書き表された形のことであるが、字形を支える要素は以下のものが挙げ

\* 教育学部国語教育講座

られる<sup>6)</sup>。

◎文字の概形と中心

◎点画の組合せ方

- ・長短      ・間隔      ・方向
- ・接し方   ・交わり方

◎部分の組立て方

- ・左右      ・上下      ・内外

◎文字の大きさ

読みやすく、書きやすい楷書漢字を支えるものとして、以上 a) ～c) の観点が考えられる。本稿では、これらの観点を基準にし、調査分析及び考察を行っていく。

### 3. 調査方法

平成 23 年度前期に開講した「小学校専門国語」履修生 76 名を対象に、初回授業中にひらがなで読みを与え、それに対応する漢字を「普段の字」で書かせた。翌週に、「普段の字」で書いた漢字と書写で扱う楷書漢字の書き方で書いた手本と比較し、気付いたことを自由に記述させた。

調査で取り上げた漢字は、全て『新編書写指導』(2006) の中の、字形を支える要素別にまとめられた漢字例から選択したものである。学生の比較後の記述の中では、字形に関する内容だけでなく、基本点画や筆順についても触れられていることから、選択した漢字は適切であると考ええる。

【取り上げた漢字と字形を支える要素】

◎点画の組立て方

「早春」「三川」：長短・間隔

「自由」「夏冬」：方向

「石炭」「学級」：接し方

「平成」「木材」：交わり方

◎部分の組立て方

「木材」「日曜」「物語」：左右からなる文字

「青空」「意義」「早春」：上下からなる文字

「気風」「庭園」：内外からなる文字

「白鳥」「主張」：文字の大きさ

学生が漢字の比較を行った際には、2. で取り上げた楷書漢字を支える観点については講義を行っていない。そのため、学生の記述には、学生の持つ漢字に対する意識がそのまま反映されているといえる。4. では、記述内容を 2. の観点と照らし合わせ、学生の漢字に対する意識について述べたい。

### 4. 結果と考察

2. で取り上げた楷書漢字を支えるものとしての a) ～c) の観点について、学生がどの程度記述できているかを分析し、考察を加える。また、2. で取り上げた以外のものは、その他として最後に取り上げる以外に、随時関連すると考えられる観点の中でも取り上げていく。

学生が記した内容にはかなり偏りが見られた。これは、学生に比較を行わせる前に、漢字を見る観点を導入していなかったことが理由と考えられる。しかし、一方で今回の記述内容から学生が漢字を見る際に何に対して意識が向いているかが明らかになったといえるであろう。以下では、学生の実際の書字漢字を例に挙げながら、どのような観点について触れられているかをまとめていく。

今回は各観点別に楷書漢字として不適当と考えられる漢字を例として挙げていくが、実際に不適当と判断される背景には、複合的な観点における問題点が含まれていることが多いことを明記しておく。なお、半角数字は履修生 76 名中の記述回答者数を示す。

#### 4-1. a) 基本点画について

基本点画について意識を向けた学生は多く、68 の学生が記述を行っている。その中でも最も多かったのが、「はね・払い・止め・そりなどがしっかりできていない」という内容で、53 が触れていた。

【はねが弱い/無い】

【払いが弱い】

【横画の止めが弱い】

【そりが弱い】

また、「折れの不十分さ」について、7 の記述が見られた。「折れ」が丸く曲がっているために、角ばった様子が見られない文字となっている。「折れ」という表現は使用していないが、「丸味のある文字」という記述が 12 あった。このように記述した学生の漢字を見ると、「折れ」の不十分さが共通しており、「折れ」として角張る部分が丸く曲げられている特徴が見られた。このことから、「折れ」そのものに触れた学生と共通する書字特徴があると考えられる。

【折れが弱い】



4-2. b) 筆順について

筆順が楷書漢字に影響を与えると意識した学生は少なく、筆順に関する記述は3に留まった。記述内容は「筆順が違う漢字はバランスが悪い」と的確に漢字と筆順の関係を描いている。しかし、3という少数の記述であったことは、筆順と漢字書字の関係について学生の意識が低いとも考えられ、今後筆順を間違いやすい漢字を挙げながら、筆順に意識を向ける指導を行うことも必要であろう。

4-3. c) 字形

字形については、「文字の概形と中心」「点画の組合せ方」「部分の組立て方」「文字の大きさ」に分けて、学生の記述を見ていく。

4-3-1. 文字の概形と中心

「概形」についての記述は7で、「平べったい/横長」あるいは「縦長」というものであった。実際に漢字の概形を考える場合には、横長・縦長という2つの形だけではなく、正方形・菱形・三角形・逆三角形など様々な形を基に考える必要があるが、学生の意識の中にあるのは長方形のみであり、それ以外の様々な形はイメージされていなかったといえる。

また、中心に関する記述は3と少なかった。しかし、実際の学生の文字を確認すると、大きく中心がずれていないものの、十分に中心が取れていない漢字も多く見られたことから、中心の取り方についても意識を向けさせる必要がある。

【中心がずれている】



4-3-2. 点画の組合せ方

点画の組合せ方については、「長短」「間隔」「方向」「接し方」「交わり方」の5つの観点があるが、学生の記述では「交わり方」に触れているものはなかった。「交わり方」とは、具体的には例えば「縦画と左払いが45度程度で交わる」などが挙げられるが、このような細かい「交わり方」にまで学生が意識を向けることは難しい

と言えるだろう。

「長短」についての記述は、11あり、「長さが全部同じ」「どれも同じくらいの長さでメリハリがない」「一番長くなるべき線が短い」などが見られた。書写の楷書漢字では、「横画が何本か並ぶ場合には一本を長くする」など、視覚的に分かりやすい書き方があり、学生にとっても意識が向けやすかったといえるだろう。

「間隔」についても11あり、「横画の間隔が均等でない」という記述が見られた。間隔については、均等に取ることが構築性の強い楷書の特徴であり、また、「等分割は空間を秩序づけるための基本条件<sup>7)</sup>」であることから意識が向けられやすい観点であろう。

【長短が不十分】



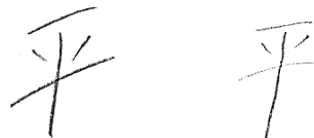
【間隔が不均衡】



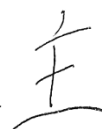
「方向」についての記述は、26と多くの記述が見られた。その内訳で目立ったものは、「右上がり強い」という記述で、7であった。漢字の横画は若干の右上がりであることが多いが、非常に強い右上がりである漢字を書く学生が何人か見られた。

その他としては、点と縦画の方向について、その強さについての記述が見られた。点の方向に関しては、「いつの間にか反対方向に点を打つようになっていた」という記述があり、「慣れ」や「経験」の中で楷書漢字の書字が崩れていく可能性があることを示唆しているであろう。

【右上がりの強調と縦画の方向】



【点の方向と横画のそり】



「方向」で注意を向けたいたのは、縦画が平行であるか、

下方に行くほど狭くなるかという点である。縦画が平行になる漢字としては「日」「目」など、下方行くほど狭くなる漢字としては「口」「由」などが挙げられる。学生の漢字の中には、この部分に対する記述が1と大変少なかったが、実際の漢字では適切な方向が表現がなされていないものも多く見られた。気付かないまま書字を行っていると考えられ、適切な指導が必要な点であろう。

#### 【縦画の平行と下方狭幅】

夏 早 石

「接し方」については、19の記述が見られた。「本来接すべきところが接していない」「接し方が適切ではない」というコメントが見られた。接すべき箇所をあいまいにすることで、字形の乱れにつながり、漢字の判読がしにくくなる場合もあり、気を付けていきたい点である。

#### 【接し方が不十分】

由 青 自 飛

以上、点画の組合せ方に関しては、「交わり方」を除いては気づきがある程度得られた。4-1. で取り上げた a) 基本点画に関する記述が68であったことから、線や点といった部分に大きく意識が向く傾向がうかがわれる。

#### 4-3-3. 部分の組立て方

漢字は、2つ以上の部分が組み合わされて作られているものが多く、学習漢字全体の8割以上を占めている<sup>8)</sup>。このことから、部分の組立てに関する点は、楷書漢字を支える重要な観点である。

部分の組立て方には、「左右」「上下」「内外」の3つの観点があるが、学生の記述には、「左右」「上下」に関するものが10ずつ、「内外」については4、見られた。

「左右」については、偏と旁の関係から、その漢字に合った割合での組合せ方が必要となるが、学生の記述には細かな点からの記述はなく、「偏/旁が小さい/大きい」「偏と旁のバランスが悪い」「偏と旁が離れている」といった漠然としたものであった。

#### 【左右の組立て】

(偏と旁の間隔が広い)

曜 語

(偏と旁の大きさが不均衡)

物 物

「上下」の組立てからなる漢字は、「冠」や「脚」を部首としているものが多いが、「上下」についても「左右」の場合と同じように、学生の記述は、「上/下が大きい」といった大きさのバランス、あるいは、「上下の空間が空きすぎ」といった間隔についての大まかな内容に触れているだけであった。

#### 【上下の組立て】

(上が小さく、下が大きい)

義 空

(上が大きく、下が小さい)

義 学

「内外」の組立ては、四方・三方・二方と囲む場所によって大きく3つに分けられるが、学生の記述には囲む位置については触れられておらず、外と内を比較した場合に内に書かれた部分が小さく、「空間が大きい」という内容であった。内外の大きさの差が著しいために、一文字として考えた場合、余白の部分が非常に目立つ傾向がある。

#### 【内外の組立て】

風 素

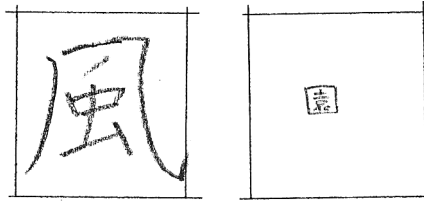
#### 4-3-4. 文字の大きさ

「文字の大きさ」が本来意図するものは、漢字によっても大小の違いがあるという点であるが、13の記述は



マス目に対する文字の大小のバランスについてであった。「マス目と比べると字が小さい/大きい」という記述である。これらの記述は、「配列」に関する指導項目で、読みやすさ・読みにくさに影響を与える余白との関係に関わるもので、重要な気づきである。

#### 【マス目とのバランス】



漢字による大小の違いについての記述は、6あり、画数と関連付けて大きさについて触れられている。「画数の多い漢字のほうが大きい」という指摘がなされていた。

#### 4-4. その他

2. で挙げた観点以外の記述を挙げておく。

4-1. で「基本点画がしっかり書けていない」と多くの学生が記述をしていたが、その原因の一つであると考えられる記述がいくつか見られた。

まず、書く速さとの関係に触れているもので、「行書っぽく書く」「速書きをする」「一筆書きが多い」「パッパッと書いてしまう」「省略する」といった記述が見られた。これらは、1. で触れた浦野他（2001）に挙げられているように、「慣れ」の部分で書字が大きく影響を受けていると言えるだろう。「速書き」等、書く速さが高まることで、楷書漢字としての基本点画の運筆が、不十分になることは否めない。「はね・払い・止め・そり」などがしっかり表現するためには、ある程度の時間をかけて書字する必要がある。

さらに、筆圧に関する記述もいくつか見られた。基本点画を意識して書こうとする場合、筆圧はある程度強くかける必要があるが、実際には基本点画が書けていない学生が多く、結果的に筆圧も弱い漢字が多くなっている。この点に気づいた学生の記述として、「筆圧が一定ではない」「筆圧が弱い」「線が細い」「線が薄い」といったものが挙げられる。

このように、2. で取り上げた楷書漢字の書字を支える観点以外にも、基本点画の運筆に関わる点についての記述が見られた。

### 5. まとめと今後の課題

「普段の字」で書いた漢字と書写で扱う楷書漢字の書き方で書いた手本との比較を通し、学生自身の漢字に対

して、意識できる観点を明らかにした。「慣れ」で書いている「普段の字」と手本を比較することで、学生自身が楷書漢字書字の際に注意すべき観点への気づきを試みた。学生自身の文字を通し、楷書漢字を支える観点を考えることで、多くの気づきが得られたと考えられる。しかし、実際には、2. で上げた観点到全て触れている学生はおらず、取り上げられた観点にもかなり偏りがあった。

まず、a) ～c) の観点の中で学生が気づきやすい観点としては、次の3点が挙げられる。これらの観点は、25%以上の学生が挙げていたものである。

- a) 基本点画（89%）
- c) 字形－点画の組合せ方－方向（34%）
- c) 字形－点画の組合せ方－接し方（25%）

これらは全て基本点画に関わる内容であり、学生が書字をする際に意識を向けやすい観点であると言える。

一方、気づいた学生が10%以下の観点は次のものである。

- c) 字形－文字の概形（9%）
- c) 字形－部分の組立て方－文字の大きさ（8%）
- c) 字形－部分の組立て方－内外からなる文字（5%）
- c) 字形－文字の中心（4%）
- b) 筆順（4%）
- c) 字形－基本点画の組合せ方－交わり方（0%）

漢字の概形と中心を捉える指導方法は、文字指導の初期の段階から取り入れられており、これは字形の大まかな特徴を把握するために非常に有効的であると考えられる。しかし、学生には、概形や中心を意識する記述は少ない。授業の中でも概形や中心を把握しながら漢字を記す機会を入れていく必要があろう。

字形の部分の組み立て方については、全体的に記述率が低い。部分の組立てに関わる観点は、構築性の高い漢字の大きな特徴であり、重要視するように指導をしてきたい点である。

さらに、筆順に関しても、指導を徹底していく必要があろう。「慣れ」から各自が書きやすいと感じるようになった筆順で書いている漢字もあると思われるが、書字後の文字だけでは筆順について明確に指摘ができない。筆順と字形との関係についても今後の課題としたい。

字形－基本点画の組合せ方－交わり方については、記述が無かったことから、学生の意識が全く向けられていないと考えられる。交わり方には、点画の長短や方向とも大きく関係するものであり、漢字書字の際には意識をし、書字できるよう、授業の方法を工夫していきたい。

学生の視点は、基本点画という最も細かい部分に向けられ、大きな枠組みである「概形」「中心」や「部分の組立て」といった観点には意識が向けられにくいことが明らかになった。今後の学生に対する書字指導の際には、大きく概形や中心を取らせることから始めていくことも必要であろう。

今回の調査結果から明らかになった、学生の楷書漢字書字の際に意識を向けさせるべき観点を中心に指導の中に取り入れる工夫を、授業改善として行っていきたい。

## 注

- 1) 拙稿「小学校における“書写”のあり方ー“書写”に対する学生の意識調査からー」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要第31号』参照.
- 2) 浦野他(2001) pp. 81 を参照.
- 3) 『新編書写指導』(2006) pp. 99 を参照.

4) 昭和36年度以降に使用される小学校用教科書検定基準の細則の中に、教科書の筆順に関する部分の編集は『筆順指導の手びき』によることが明記されたが、昭和55年度以降使用の小学校用教科書の検定基準細則からは、手びきによるべきことの一項は除外されている.

- 5) 『新編書写指導』(2006) pp. 104 参照.
- 6) 同上 pp. 106-119 参照.
- 7) 同上 pp. 108 参照.
- 8) 同上 pp. 112 参照.

## 参考文献

浦野俊則他「教員養成課程学生の書写力と授業改善」『書写書道教育研究』第15号, 2001  
全国大学書写書道教育学会編『新編書写指導』萱原書房, 2009